需給動向

# 国内の畜産物の需給動向

## 牛　肉

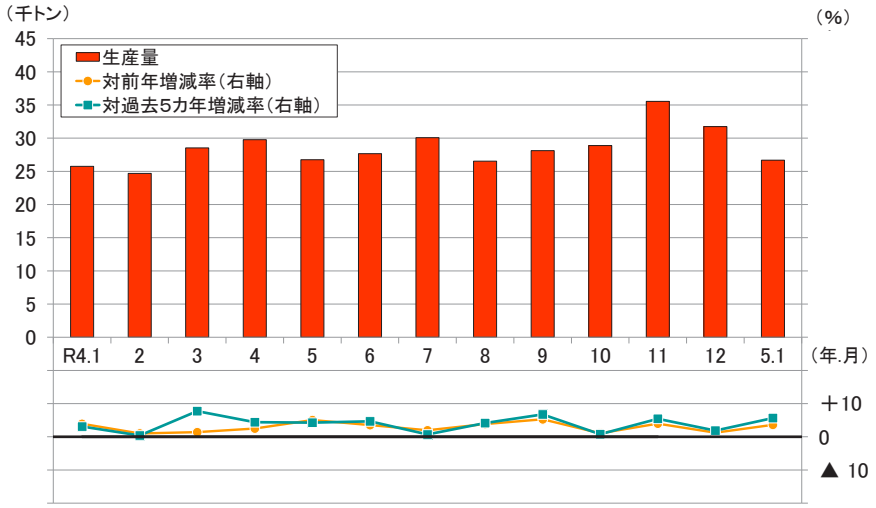
### ５年１月の牛肉生産量、前年同月比3.6%増

#### 生産量

令和５年１月の牛肉生産量は、２万6685トン（前年同月比3.6%増）と前年同月をやや上回った（図１）。品種別では、和牛は１万2007トン（同3.3%増）とやや、交雑種は7349トン（同8.8%増）とかなりの程度前年同月を上回った一方、乳用種は6960トン（同0.0%増）と前年同月並みとなった。

なお、過去５カ年の１月の平均生産量との比較では、5.6%増とやや上回る結果となった。

図１　牛肉生産量の推移



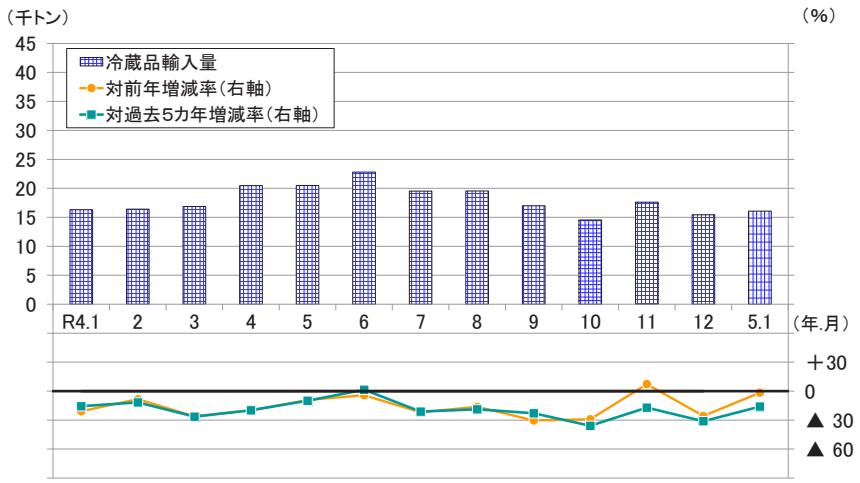

資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

#### 輸入量

１月の輸入量は、冷蔵品は、現地相場の高止まりなどにより、豪州産などの輸入量が少なかったことから、１万6063トン（同1.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図２）。また、冷凍品も、入船遅れの影響などにより豪州産などの輸入量が少なかったことから、２万3814トン（同1.0%減）と前年同月をわずかに下回った（図3）。この結果、全体では3万9915トン（同1.2%減）と前年同月をわずかに下回った。

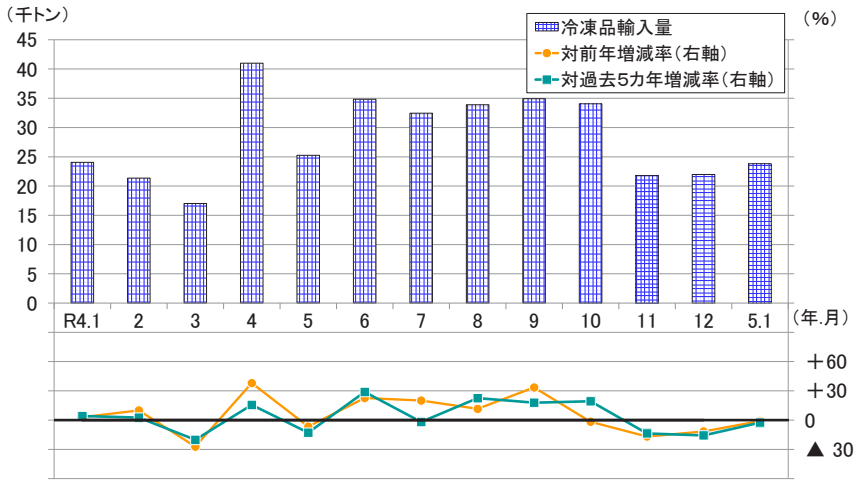
なお、過去5カ年の1月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は16.0%減と大幅に、冷凍品は2.6%減とわずかに、いずれも下回る結果となった。

図２　冷蔵牛肉輸入量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図３　冷凍牛肉輸入量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

## 家計消費量等

1月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は169グラム（同9.1%減）と前年同月をかなりの程度下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の1月の平均消費量との比較でも、7.5%減とかなりの程度下回る結果となった。

1月の外食産業全体の売上高は、前年のような営業制限がなく年始需要が好調であったことから、前年同月比で15.3%増とかなり大きく上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、期間限定商品や季節商品などのフェアメニューが好評であったことなどから、同11.3%増と前年同月をかなり大きく上回った。また、牛丼店を含むファーストフードの和風は、引き続きテイクアウトやデリバリーが堅調であったことなどから、同9.6%増と前年同月をかなりの程度上回った。ファミ

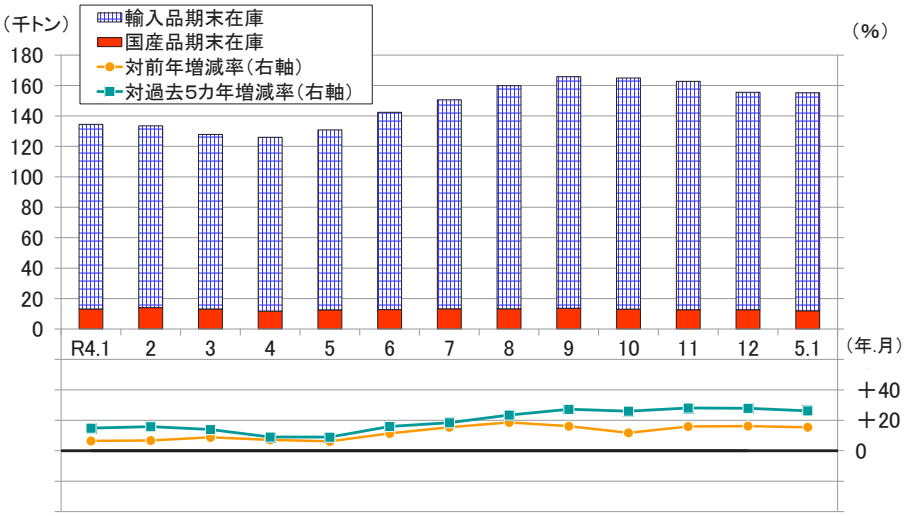
リーレストランの焼き肉は、郊外店舗が継続して好調であったことなどから、同22.7%増と前年同月を大幅に上回った。

## 推定期末在庫・推定出回り量

1月の推定期末在庫は、15万5229トン（同15.4%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図４）。前年同月比で17カ月連続の増加となった。このうち、輸入品は14万3273トン（同18.1%増）と前年同月を大幅に上回った。

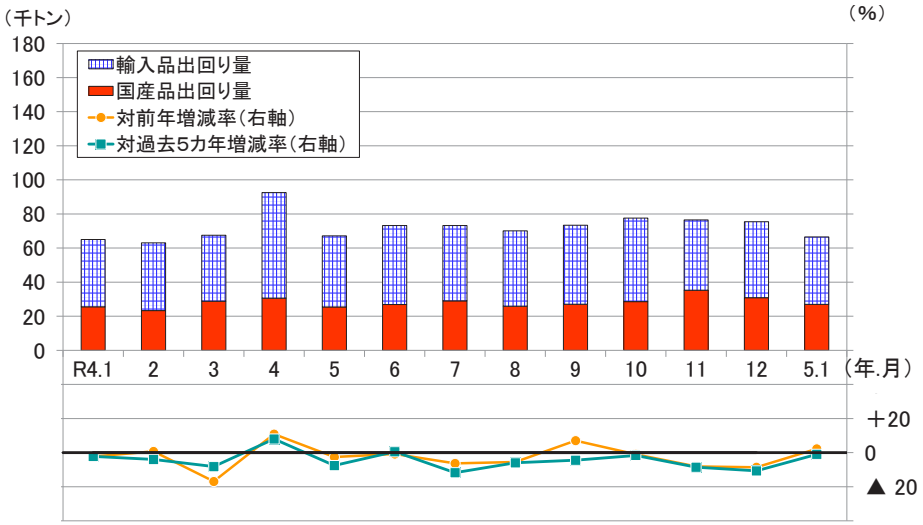
推定出回り量は、６万6506トン（同2.2%増）と前年同月をわずかに上回った（図５）。このうち、国産品は２万6988トン（同5.5%増）と前年同月をやや上回った一方、輸入品は３万9518トン（同0.1%増）と前年同月並みとなった。

図４　牛肉期末在庫の推移




資料：農畜産業振興機構調べ

図５　牛肉出回り量の推移




資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　大内田　一弘）

# 豚　肉

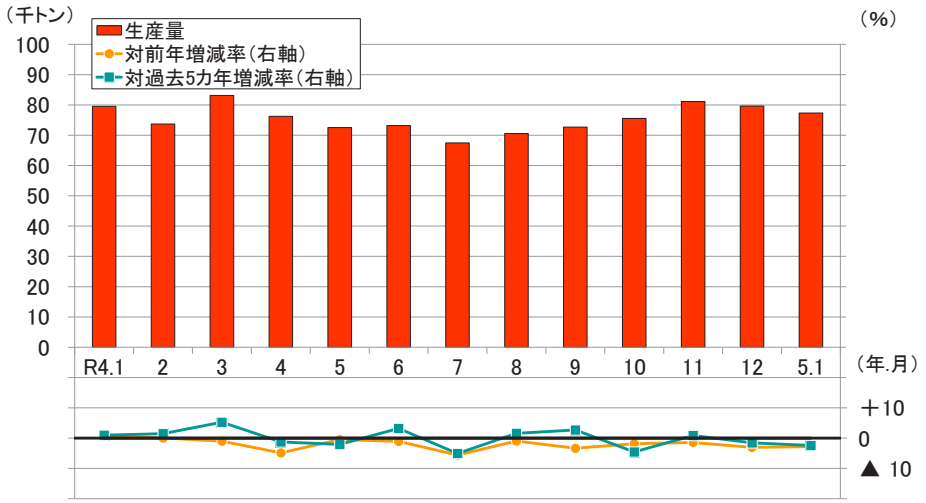
## ５年１月の豚肉生産量、前年同月比2.8％減

### 生産量

令和５年１月の豚肉生産量は、７万7331トン（前年同月比2.8％減）と前年同月をわずかに下回った（図１）。

なお、過去５カ年の１月の平均生産量との比較でも、2.4％減とわずかに下回る結果となった。

図１　豚肉生産量の推移



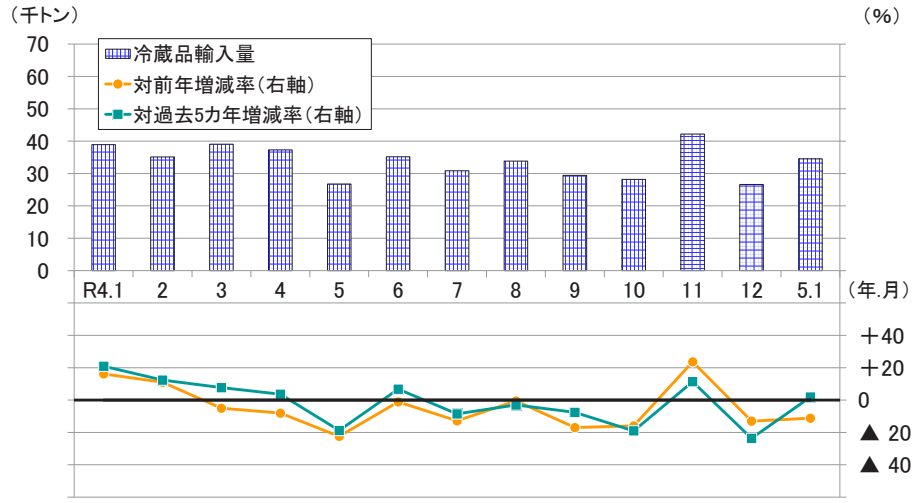

資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

### 輸入量

１月の輸入量は、冷蔵品は、北米の現地相場の高止まりや為替の影響に加え、前年同月の輸入量が通関遅れにより多かったことなどから、３万4546トン（同11.2％減）と前年同月をかなり大きく下回った（図２）。また、冷凍品は、国内在庫水準の増加や前年同月の欧州産の輸入量増加などの反動から、４万290トン（同7.6％減）と前年同月をかなりの程度下回った（図３）。なお、冷凍品の輸入量は３カ月連続の減少となった。この結果、全体では７万4837トン（同9.3％減）と前年同月をかなりの程度下回った。

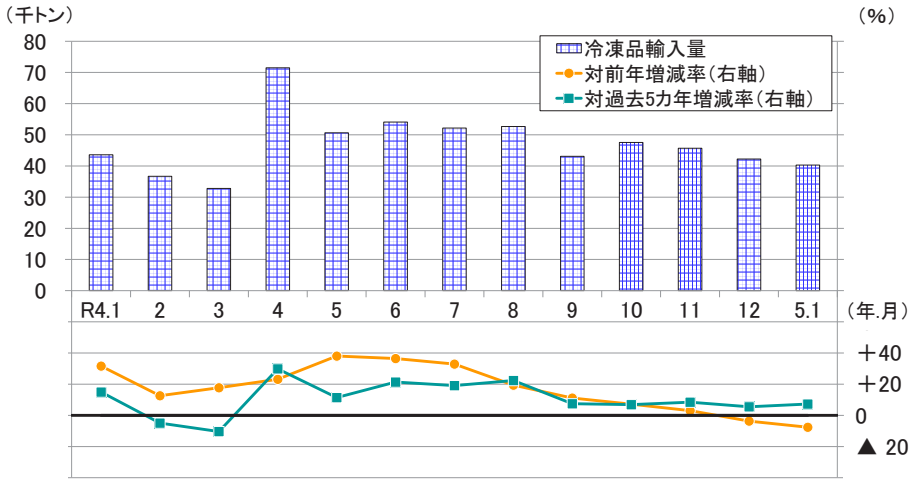
なお、過去５カ年の１月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は1.9％増とわずかに、冷凍品は7.3％増とかなりの程度、いずれも上回る結果となった。

図２　冷蔵豚肉輸入量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図３　冷凍豚肉輸入量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

## 家計消費量

１月の豚肉の家計消費量（全国１人当たり）は、646グラム（同2.0%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

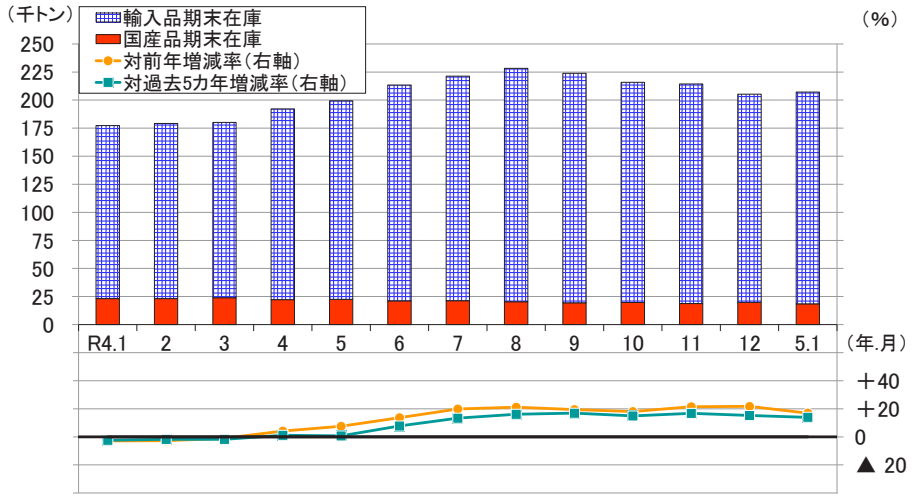
なお、過去５カ年の１月の平均消費量との比較では、2.5%増とわずかに上回る結果となった。

## 推定期末在庫・推定出回り量

１月の推定期末在庫は、20万7204トン（同16.9%増）と前年同月を大幅に上回った（図４）。このうち、輸入品は、18万8666トン（同22.5%増）と前年同月を大幅に上回った。

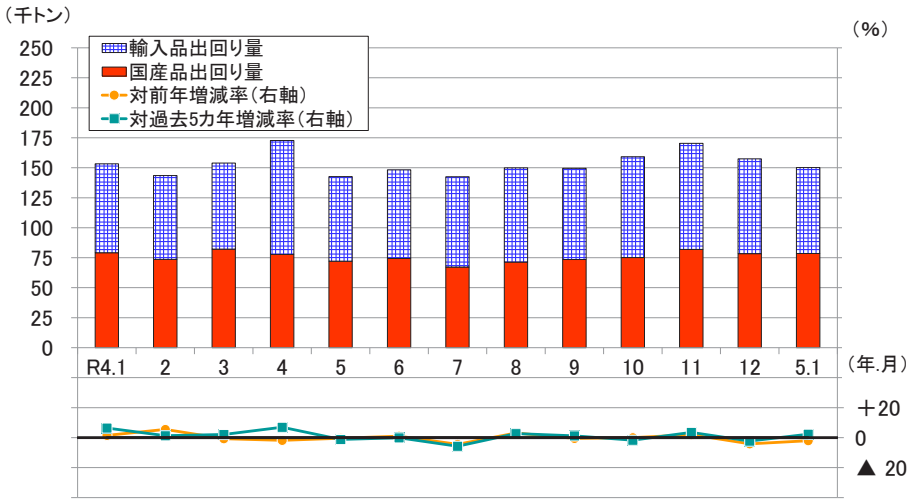
推定出回り量は15万141トン（同2.0%減）と前年同月をわずかに下回った（図５）。このうち、国産品は７万8557トン（同0.7%減）とわずかに、輸入品は７万1584トン（同3.5%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

## 図４　豚肉期末在庫の推移




資料：農畜産業振興機構調べ

## 図５　豚肉出回り量の推移




資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　田中　美宇）

# 鶏　肉

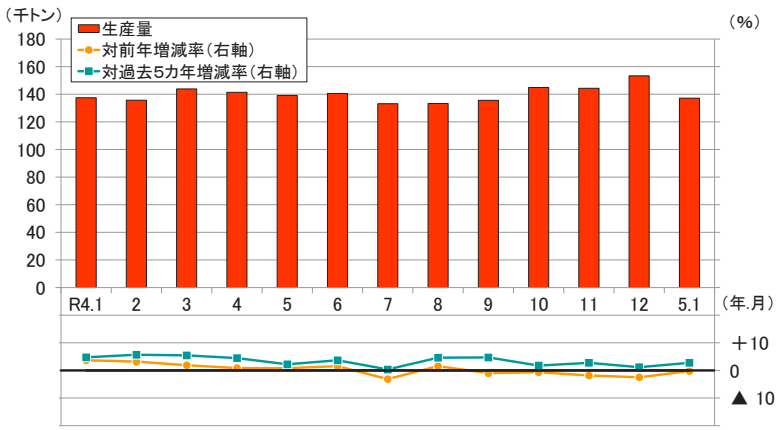
## ５年１月の鶏肉生産量、前年同月比0.2%減

### 生産量

令和５年１月の鶏肉生産量は、13万7179トン（前年同月比0.2%減）と前年同月並みとなった（図１）。

なお、過去５カ年の1月の平均生産量との比較では、2.8%増とわずかに上回った。

図１　鶏肉生産量の推移



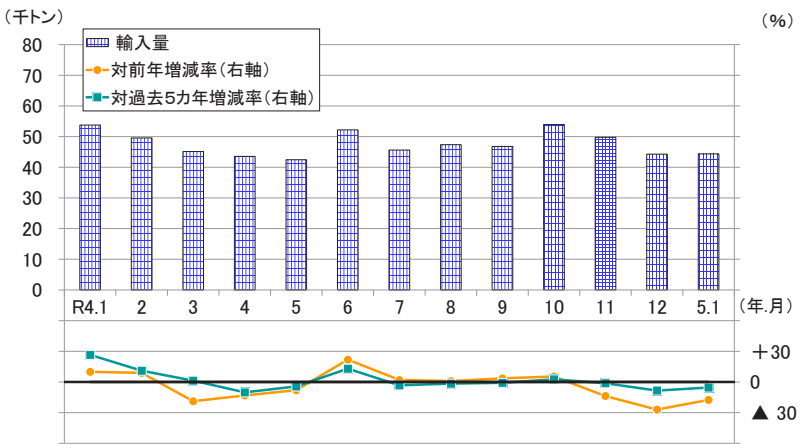

資料：農畜産業振興機構調べ
注１：骨付き肉ベース。
注２：成鶏肉を含む。

### 輸入量

1月の輸入量は、前年同期のブラジル産の買い付け時に国内在庫が低水準であったことにより当時の輸入量が多かったことなどから、4万4361トン（同17.5%減）と前年同月を大幅に下回った（図２）。

なお、過去５カ年の1月の平均輸入量との比較でも、5.5%減とやや下回る結果となった。

図２　鶏肉輸入量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

## 家計消費量

１月の鶏肉の家計消費量（全国１人当たり）は、514グラム（同3.9%減）と前年同月をやや下回った（総務省「家計調査」）。

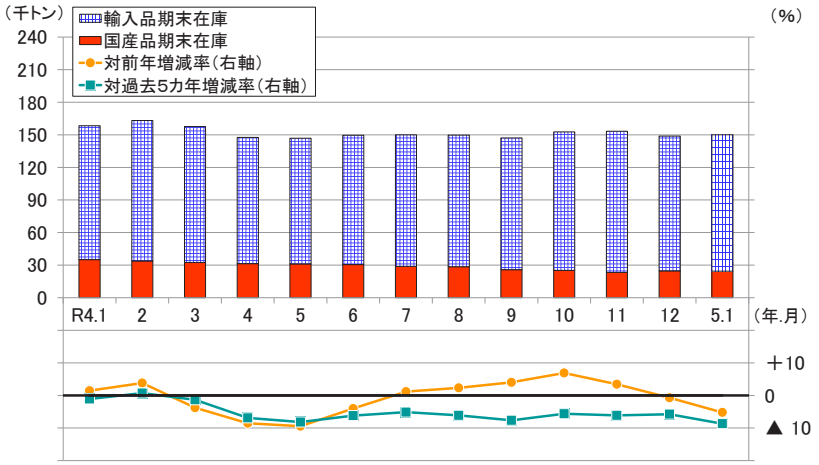
なお、過去５カ年の１月の平均消費量との比較では、3.8%増とやや上回る結果となった。

## 推定期末在庫・推定出回り量

1月の推定期末在庫は、15万21トン（同5.2%減）と前年同月をやや下回った（図３）。このうち、輸入品は12万5588トン（同1.9%増）と前年同月をわずかに上回った。

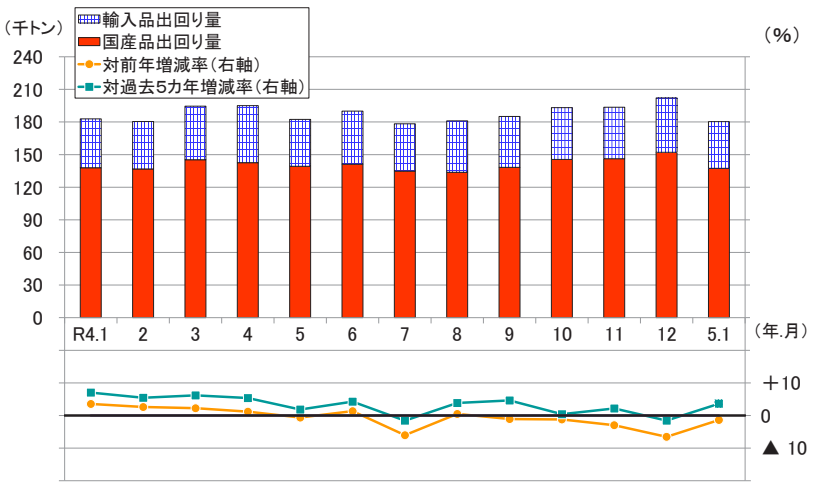
推定出回り量は、18万343トン（同1.4%減）と前年同月をわずかに下回った（図４）。このうち、国産品は13万7390トン（同0.4%減）とわずかに、輸入品は4万2953トン（同4.5%減）とやや、いずれも前年同月を下回った。

図３　鶏肉期末在庫の推移




資料：農畜産業振興機構調べ

図４　鶏肉出回り量の推移




資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　郡司　紗千代）

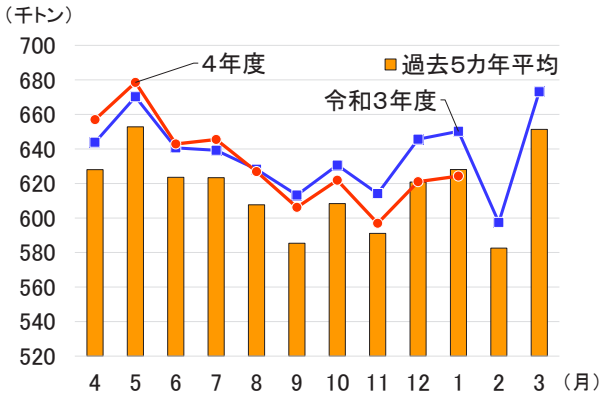
# 牛乳・乳製品

## ５年１月の脱脂粉乳生産量、前年同月比7.0%減

### １月の生乳生産量、前年同月比4.0%減

令和5年1月の生乳生産量は、62万4256トン（前年同月比4.0%減）と前年同月をやや下回り、6カ月連続で前年同月を下回った（図１）。地域別に見ると、北海道は34万9632トン（同4.7%減）、都府県は27万4624トン（同3.1%減）とともに前年同月をやや下回った。北海道は5カ月、都府県は６カ月連続でそれぞれ前年同月を下回った。これは生産抑制などによるものとみられる。

図１　生乳生産量の推移




資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

１月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、31万4519トン（同4.1%減）と前年同月をやや下回った。このうち、業務用向けについては、2万4591トン（同4.0%減）と前年同月をやや下回った。

乳製品向けは、30万5812トン（同3.8%減）と前年同月をやや下回り、６カ月連続で前年同月を下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは、5万7206トン（同4.4%減）と前年同月をやや下回った一方で、チーズ向けは、４万525トン（同4.9%増）とやや上回った。脱脂粉乳・バター等向けは、16万4603トン（同5.8%減）と前年同月をやや下回った（農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

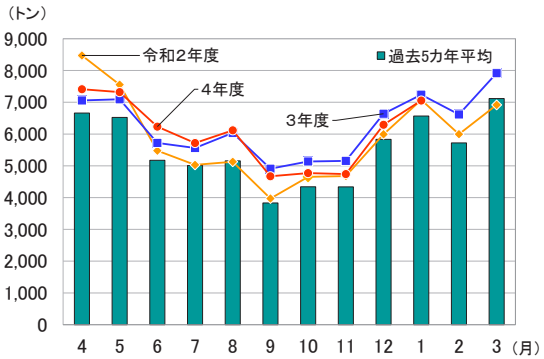
１月の牛乳等の生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は25万591キロリットル（同4.4%減）と前年同月をやや下回り、成分調整牛乳は1万9936キロリットル（同6.7%減）と前年同月をかなりの程度下回った。加工乳は、１万2310キロリットル（同19.3%増）と前年同月を大幅に上回った。

乳製品のうち、クリームは9631トン（同5.1%減）と前年同月をやや下回った。

### 1月のバター在庫量、9カ月連続で前年同月を下回る

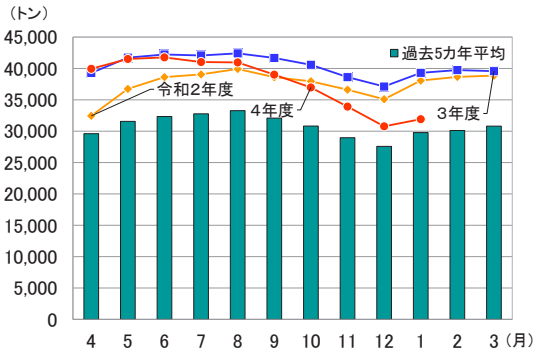
１月のバターの生産量は、7054トン（同2.5%減）と前年同月をわずかに下回り、５カ月連続で前年同月を下回った（図２）。一方で出回り量は6866トン（同17.7%増）と前年同月を大幅に上回った（農畜産業振興機構調べ）。１月末の在庫量は、３万1919トン（同18.8%減）と前年同月を大幅に下回り、９カ月連続で前年同月を下回った（図３）。

図２　バターの生産量の推移



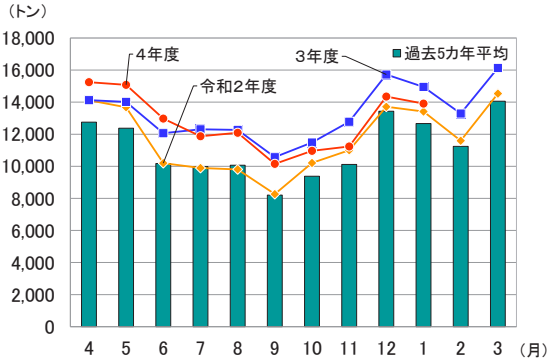

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図３　バターの在庫量の推移



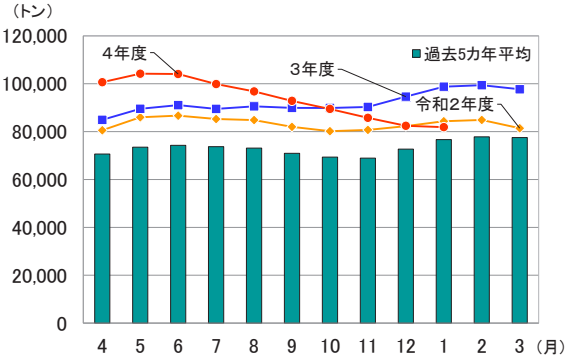

資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図４　脱脂粉乳の生産量の推移




資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図５　脱脂粉乳の在庫量の推移




資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

## 1月の脱脂粉乳生産量、前年同月比7.0%減

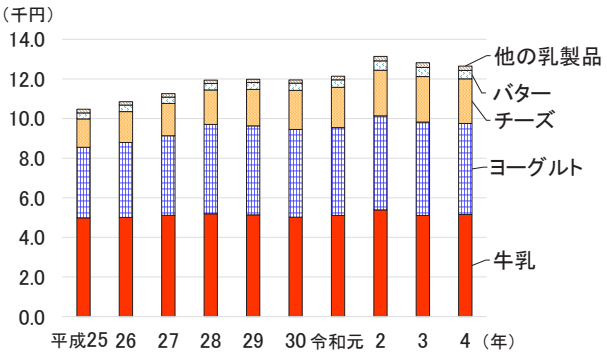
1月の脱脂粉乳の生産量は、1万3910トン（同7.0%減）と前年同月をかなりの程度下回る一方で（図4）、出回り量は1万4470トン（同33.8%増）と前年同月を大幅に上回った（農畜産業振興機構調べ）。1月末の在庫量は、8万1860トン（同17.1%減）と在庫解消対策などにより、8カ月連続で前月を下回り、4カ月連続で前年同月を下回った（図5）。

## 令和4年1人当たり牛乳・乳製品支出金額、2年連続減

総務省が令和5年2月に公表した「家計調査結果」によると、4年（1～12月）の全国1人当たりの牛乳・乳製品の支出金額は1万2896円（前年比1.2%減）と前年をわずかに下回り、2年連続で減少した（図6）。これは、巣ごもり需要の解消や物価高騰による食品の値上げなどが影響していると考えられる。

内訳を見ると、バターが426円（同8.4%

図６　牛乳・乳製品の支出金額（全国１人当たり）の推移

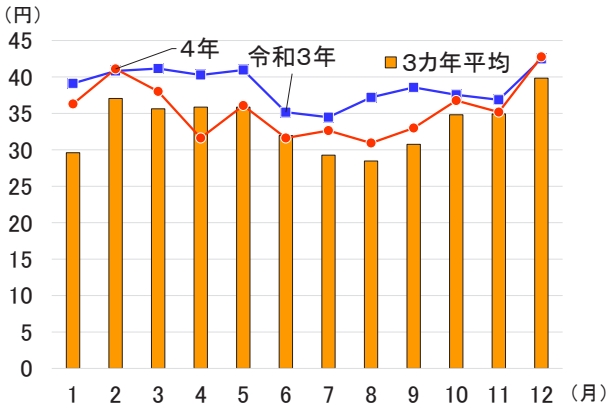



資料：総務省「家計調査」
注１：１世帯（２人以上の世帯）当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。
注２：消費税を含む。
注３：贈答用など自家消費以外のものを含む。

減）と前年をかなりの程度下回り、チーズが2247円（同2.1%減）、ヨーグルトが4596円（同2.5%減）とそれぞれ前年をわずかに下回った。

バターについては、月別に見ると2月を除いて前年同月を下回っているが、これは緊急事態宣言の解除に伴い、巣ごもり需要が解消されたことが原因とみられる（図７）。

**図７　バターの支出金額（全国１人当たり）の推移**




資料：総務省「家計調査」
注１：１世帯（２人以上の世帯）当たりの数値を当該年の世帯人数で除して算出。
注２：消費税を含む。
注３：贈答用など自家消費以外のものを含む。

（酪農乳業部　髙橋　沙織）

# 鶏　卵

## ５年２月の鶏卵卸売価格、300円/kg超え

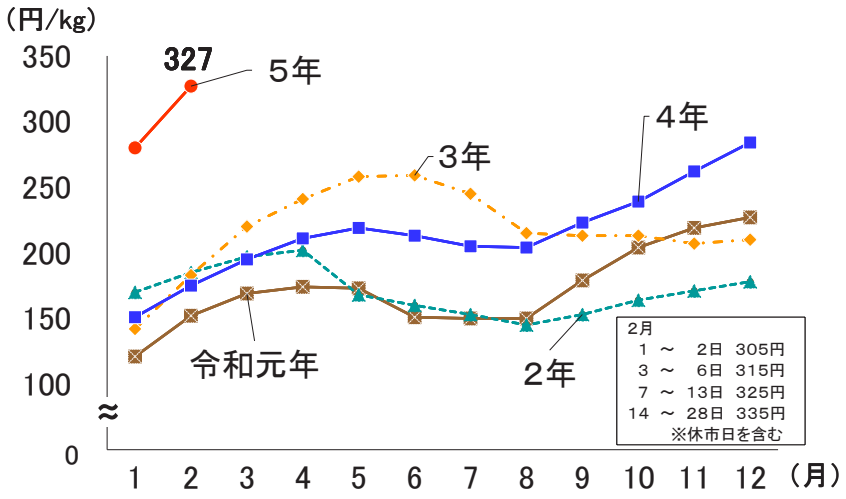
令和5年2月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり327円（前年同月差152円高）となり、前月の280円から47円上昇した（図１）。

前月の同価格（280円）は年末の需要期を過ぎたことで４年12月の価格（284円）よりいったん下がったものの、例年の変動の傾向に加え、継続する生産コストの上昇や、高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）の拡大などが影響したものと考えられ、2月中の卸売価格は上昇が続き、同月末の終値は335円となった。

対前年同月比でも、１月は185.4%、2月は186.9%と高値水準が続いており、また、過去5カ年の2月平均価格177円に対して、本年2月の卸売価格は150円高（過去５カ年平均比84.7%高）となった。

卸売価格は例年春先に向けて上昇する傾向にあり、今後も、全国的に発生しているHPAIの影響が懸念される。また、需要面では、入学、就職など新しい季節を迎え、外出や旅行など外食需要が見込まれるものの、高値水準が続いているため見通しは不透明である。

図１　鶏卵卸売価格（東京、Ｍ玉）の推移



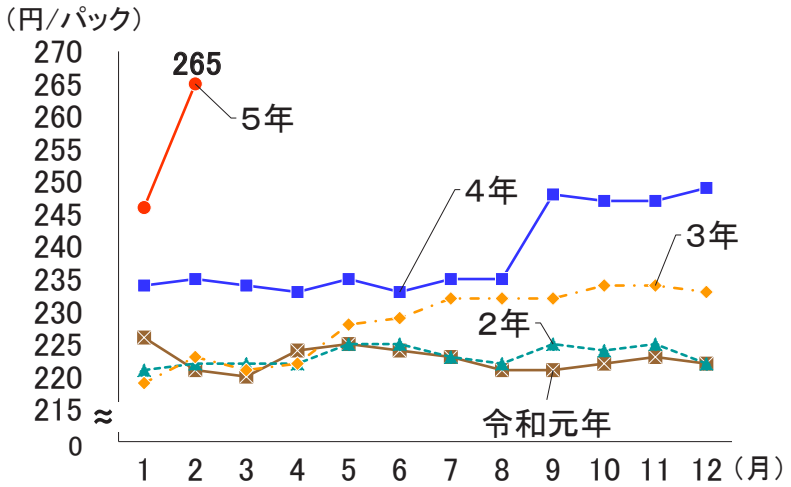

資料：ＪＡ全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

## 鶏卵小売価格、平成27年12月以来の260円台

２月の小売価格（東京都区部）を見ると、１パック当たり265円（前年同月比30円高、12.8%高）となった（図２）。前月と比較しても19円高となり、同価格が260円台の水準となるのは平成27年12月以来、約７年ぶりとなる。

小売価格は、例年と異なる様相を見せており、卸売価格に影響される形で高水準で推移している。このような中、前月は年末の需要期を過ぎたことで４年12月よりわずかに下落したものの、２月は再び上昇した。なお、過去５カ年の２月の平均価格227円と比べても38円高い水準となっている。

図２　鶏卵小売価格の推移




注１：消費税を含む。
注２：サイズ混合（卵重「MS52グラム～LL76グラム未満」、「MS52グラム～Ｌ70グラム未満」または「M58グラム～Ｌ70グラム未満」）。

（畜産振興部　生駒　千賀子）

# 令和４年の畜産物の輸出動向について

令和4年の農林水産物・食品の輸出については、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響が続くものの、多くの国･地域で、外食需要が回復するとともに、小売やEC販売などが引き続き堅調だったことに加え、円安による海外市場での割安感も追い風となり、過去最高額となる1兆4148億円（前年比14.3%増）に達した。そのうち、畜産物は968億2000万円（同8.6%増）となったところであるが、その畜種別の輸出動向を紹介する。

## 【牛肉】

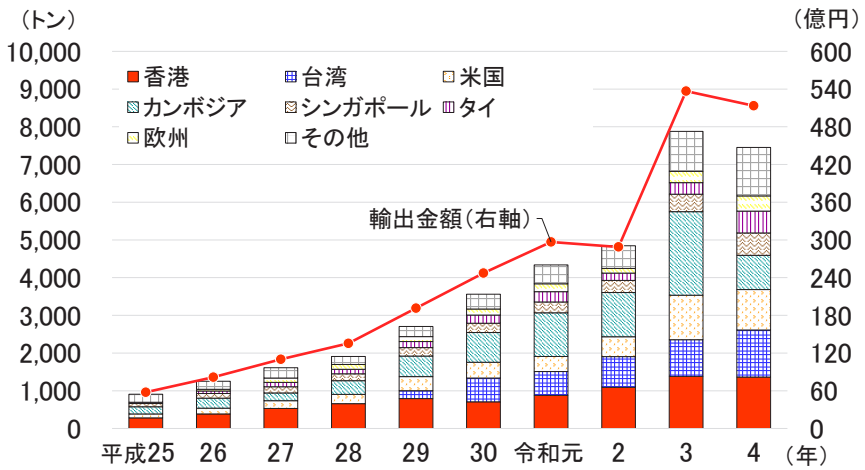
### 輸出量、前年比5.4%減

4年の牛肉輸出量（牛くず肉を除く。以下同じ）は、台湾や欧州への輸出量が伸びたものの、全体では7454トン（前年比5.4%減）とやや減少した（図1）。これは、米国における物価高および低関税枠超過後の関税引き上げによる需要減退の影響などによるものとみられる。

また、同年の輸出先は42カ国･地域に上り、その国・地域別の輸出シェアを見ると、香港向けが18%となり、前年トップだったカンボジアを上回った。次いで米国が17%、カンボジアが12%となった。

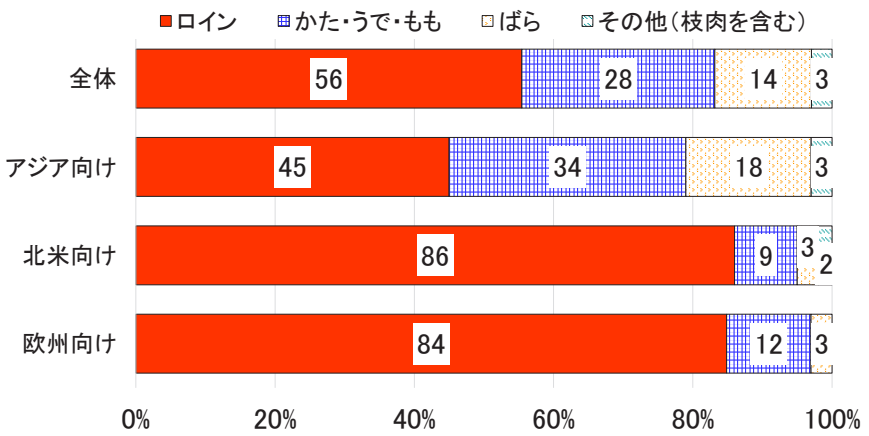
４年の輸出金額は、513億4562万円（同4.3%減）と前年からやや減少した。また、同年の牛肉輸出量の部位別割合を見ると、全体に占める「ロイン」の割合が56%と最も高く、次いで「かた･うで･もも」が28%、「ばら」が14%となった（図２）。なお、北米や欧州向けはサーロインなどのロインを中心とした輸出となっている一方、アジア向けはフルセットでの輸出が比較的多く、全体を含めこの傾向に変化は見られない。

図１　牛肉輸出量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：統計品目番号（0201、0202）。

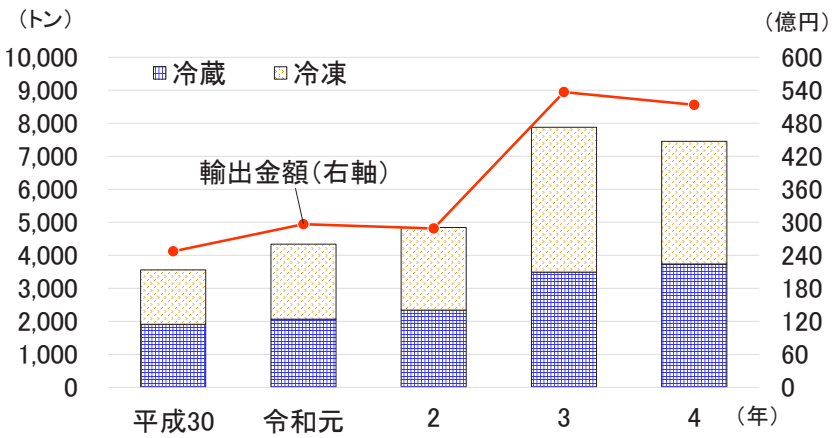
図２　牛肉輸出量の部位別割合（令和４年）




資料：財務省「貿易統計」
注１：統計品目番号（0201、0202）。四捨五入の関係により合計と一致しない場合がある。
注２：端数処理の関係から内訳の合計が100%にならない場合がある。

４年の冷蔵･冷凍別の牛肉輸出量を見ると、冷蔵は3737トン（同7.1%増）と前年をかなりの程度上回った一方、冷凍は3717トン（同15.3%減）と前年からかなり大きく減少した（図３）。全体に占める「冷蔵」と「冷凍」の割合は50%:50%となったが、前年からは「冷蔵」は６ポイント上昇した一方、「冷凍」が6ポイント低下した。輸出量のうち、カンボジア向けは冷凍の割合が高く、台湾向けは冷蔵の割合が高い傾向がある。その中で輸出量のシェア率において、台湾がカンボジアを上回ったことに加え、和牛肉は富裕層を中心に一定のブランドとして認知されており、ｅコマースなどで冷蔵肉の販路がさらに拡大されたことなどによるものとみられる。

図３　冷蔵・冷凍別の牛肉輸出量の推移



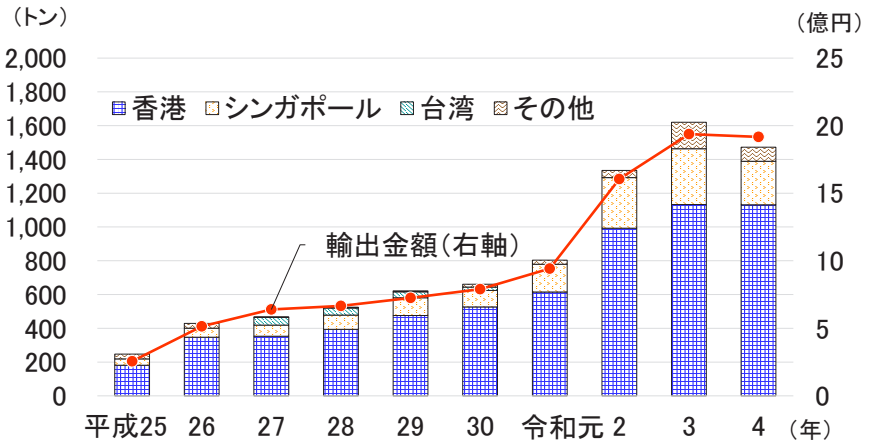

資料：財務省「貿易統計」
注：統計品目番号（0201、0202）。

## 【豚肉】

### 輸出量、前年比9.1％減

4年の豚肉輸出量（豚くず肉を除く。以下同じ）は、1473トン（前年比9.1％減）と前年からかなりの程度減少した（図４）。同年の輸出先は、日本国内での豚熱（CSF）発生を受けて平成30年11月以降台湾向け輸出の一時停止が続いており、輸出実績としては、前年と同数の7カ国・地域となった。国・地域別シェアでは、香港向けが77％と最も高く、次いでシンガポール向けが18％となった。

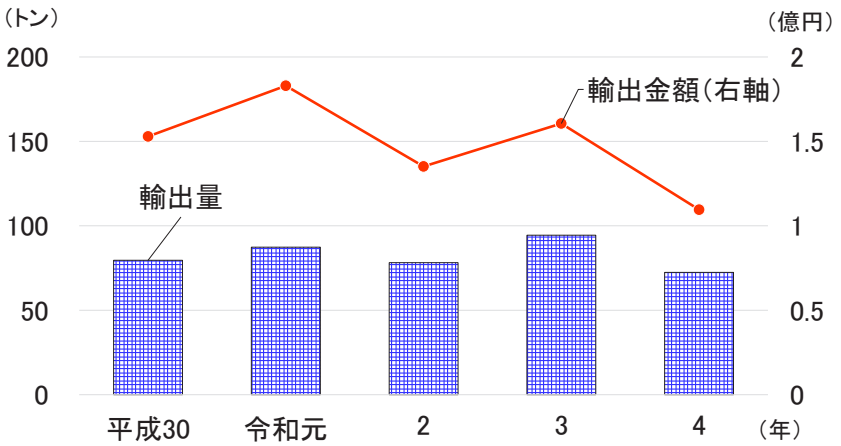
図４　豚肉輸出量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：統計品目番号（0203）。

令和4年の輸出金額は、19億1634万円（同1.1％減）と前年からわずかに減少した。香港における外食制限の影響に加え、日本国内で国産豚肉の需要が輸入豚肉価格の高騰により高まったことなどから、輸出量および輸出金額が減少したとみられる。この傾向はソーセージやハムなどを含む豚肉加工品（豚肉調製品（ゆでた豚足など）を除く。以下同じ）でも見られ、４年の輸出量は72トン（同23.3％減）と前年から大幅に減少した（図５）。

図５　豚肉加工品輸出量の推移（豚肉調製品を除く）




資料：財務省「貿易統計」
注：統計品目番号（021011、021012、021019、1601、160241、160242）。

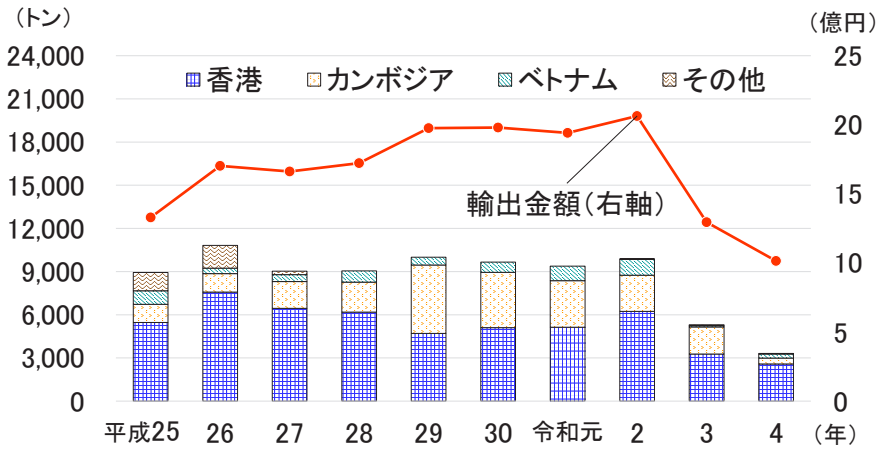
## 【鶏肉】

### 輸出量、前年比37.4%減

４年の鶏肉輸出量は、日本国内での高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）発生を受けた輸出停止および輸出先での需要減退などの影響により、3318トン（前年比37.4%減）と前年から大幅に減少した（図６）。同年の輸出先は、前年と同数の５カ国･地域となった。国・地域別に見ると、シェアは香港向けが77.7%と最も高く、次いでカンボジア向けが12.4%となった。

なお、輸出金額も、10億1454万円（同21.7%減）と前年から大幅に減少した。

図６　鶏肉輸出量の推移

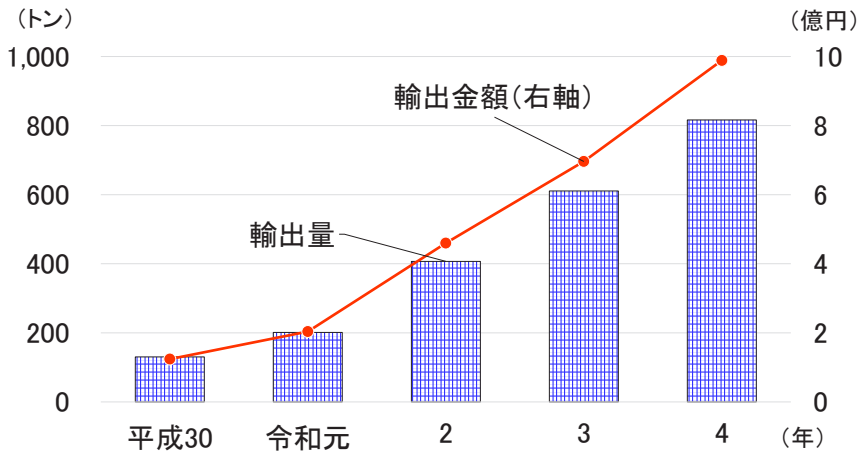



資料：財務省「貿易統計」
注：統計品目番号（0207）。

一方、空揚げやサラダチキンといった鶏肉加工品の輸出量は、816トン（同33.6%増）と前年から大幅に増加した（図７）。国・地域別では、香港向けの割合が95.7%となった。

なお、輸出金額も、９億8875万円（同42.0%増）と前年から大幅に増加した。

図７　鶏肉加工品輸出量の推移




資料：財務省「貿易統計」
注：統計品目番号（160232）。

## 【牛乳・乳製品】

### 輸出金額、前年比30.9%増

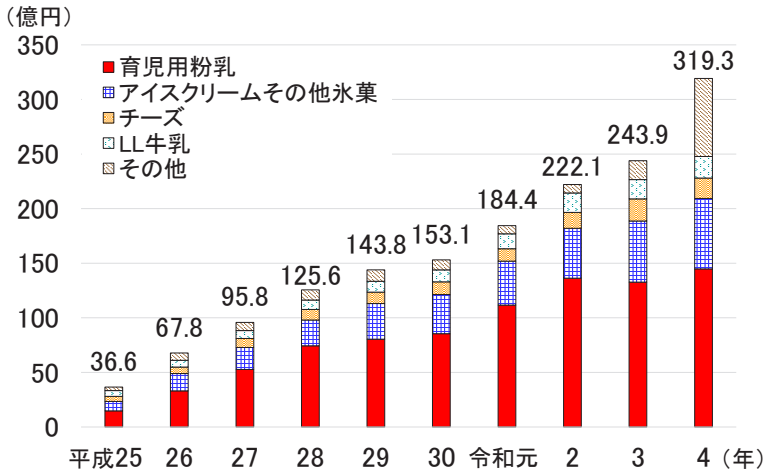
４年の牛乳・乳製品の輸出金額は過去最高額の319億円（前年比30.9%増）と大幅に増加した（図８）。

主な輸出先である台湾や香港、シンガポールなど東南アジアへの輸出量が増え、全体輸出金額が増加する結果となった。

品目別に見ると、最も輸出金額の多い育児用粉乳が144億円（同9.1%増）、次いで、アイスクリームその他氷菓が65億円（同15.3%増）、チーズが19億円（同7.8%減）、LL牛乳が20億円（同12.3%増）となった。

その他については、特に粉乳類の輸出量が大きく伸びており、国別に見ると輸出金額の多い順にフィリピン、次いでマレーシア、シンガポールとなっている。

**図８　牛乳・乳製品の輸出金額の推移**




資料：財務省「貿易統計」
注１：輸出金額は、牛乳・乳製品の合計量。
注２：統計品目番号は、0401 ～ 0406、1901.10-000、2105.00-000、3501。

## 【鶏卵】

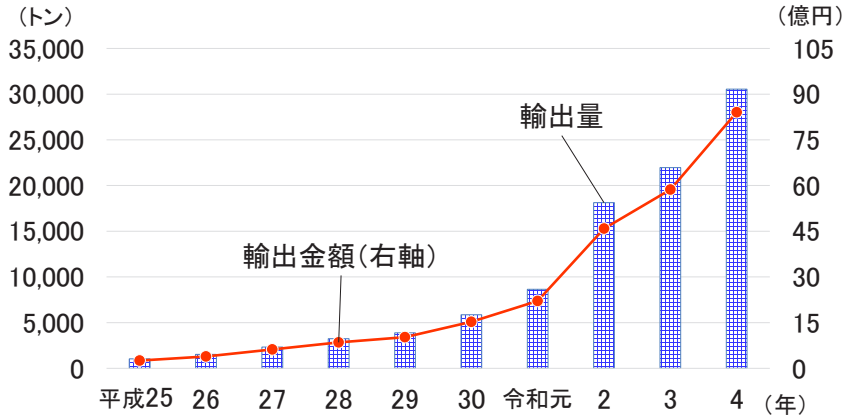
### 輸出量、前年比39.1%増

４年の鶏卵（殻付き卵）の輸出量は３万556トン（前年比39.1%増）、輸出金額は84億436万円（同43.3%増）となった（図９）。

輸出量を国・地域別で見ると、鶏卵の総輸出量の約93%を占める香港向けが2万8256トン（同30.8%増）、次いで台湾向けが1952トン（前年0トン）と、いずれも大幅に増加した。香港においては内食需要が増加したことで、引き続き日本産鶏卵の市場が拡大している状況がうかがえる。また、日本国内におけるHPAIの発生により一部の国・地域への輸出制限があったものの、４年にはHPAIの発生県以外からの輸入が特例的に認められた台湾への輸出が増加した。

日本の高い衛生管理による鮮度や品質が評価されていることからも、今後、さらなる需要拡大が期待されている。

図９　鶏卵（殻付き卵）輸出量・輸出金額の推移




資料：財務省「貿易統計」
注１：数値は殻付き卵（食用）。
注２：統計品目番号は、0407.21-000、0407.29-000、0407.90-000。

（食肉、鶏卵：畜産振興部　田中　美宇、牛乳・乳製品：酪農乳業部　髙橋　沙織）